千葉県八千代市

市内遺跡発掘調査報告書

川崎山遺跡ｇ地点

郷　　遺　　跡

川　向　遺　跡

平成11年度

八千代市教育委員会

例　　言

1．本書は、八千代市内に所在する、川崎山遺跡ｇ地点、郷遺跡、川向遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、八千代市教育委員会が平成10年度市内遺跡発掘調査事業として国庫及び県費の補助を受けて実施した。なお、本書に掲載した調査は、平成10年度市内遺跡発掘調査事業のうち、年度末に実施したものである。

3．調査遺跡の所在地、期間、面積、調査原因は下記のとおりである。

No.	遺跡名	所在地	調査期間	面積	調査原因
1	川崎山遺跡 ｇ地点	萱田町字川崎山738-1 他	11.2.17～11.3.3	750㎡ ／7,215㎡ 本調査　60㎡	共同住宅建設
2	郷遺跡	保品字間谷1426-2 他	11.3.8～11.3.17	604㎡ ／4,379㎡	草地造成
3	川向遺跡	吉橋字川向3031 他	11.3.17～11.3.29	1,029㎡ ／10,714㎡ 本調査　30㎡	草地造成

4．整理作業は平成10年度事業として平成11年３月４日から３月31日までの期間に行い、報告書印刷は平成11年度事業として平成11年８月18日から９月30日までの期間に行った。

5．本書の執筆は、宮澤久史がⅠを、常松成人がⅡ－１を、武藤健一がⅡ－２・３を行った。

目　　次

Ⅰ　調査に至る経緯……2
Ⅱ　各遺跡の概要……4
　1．川崎山遺跡ｇ地点……4
　2．郷遺跡……8
　3．川向遺跡……11
報告書抄録……20
調査組織……21

挿　図　目　次

第１図　市内遺跡位置図……3
第２図　川崎山遺跡ｇ地点位置図……4
第３図　川崎山遺跡ｇ地点遺構検出状況図……6
第４図　川崎山遺跡ｇ地点土層断面図……6
第５図　川崎山遺跡ｇ地点土坑実測図(1)……6
第６図　川崎山遺跡ｇ地点土坑実測図(2)……7
第７図　郷遺跡位置図……8
第８図　郷遺跡遺構検出状況図……9
第９図　郷遺跡土層断面図……10
第10図　郷遺跡出土土器……10
第11図　川向遺跡位置図……11
第12図　川向遺跡遺構検出状況図……12
第13図　川向遺跡土層断面図……12
第14図　川向遺跡土坑実測図……13
第15図　川向遺跡出土土器……14

図　版　目　次

図版１　川崎山遺跡ｇ地点……16
(1) 調査状況　(2) １号土坑土層断面　(3) １号土坑完掘状況
(4) ２号土坑完掘状況　(5) ３号土坑土層断面　(6) ３号土坑完掘状況
(7) ４号土坑土層断面　(8) ４号土坑完掘状況
図版２　郷遺跡……17
(1) 調査区全景　(2) 土層断面　(3) 調査風景
(4) 遺構検出状況　(5) 遺構検出状況　(6) 遺構検出状況
(7) 遺構検出状況　(8) 出土遺物
図版３　川向遺跡(1)……18
(1) 調査区全景　(2) ４Ｔ北端部西壁土層断面　(3) 調査風景
(4) 調査風景　(5) １号土坑土層断面　(6) １号土坑完掘状況
(7) ２号土坑土層断面　(8) ２号土坑完掘状況
図版４　川向遺跡(2)……19
(1) ３号土坑土層断面　(2) ３号土坑完掘状況　(3) ４号土坑土層断面
(4) ４号土坑完掘状況　(5) 出土遺物

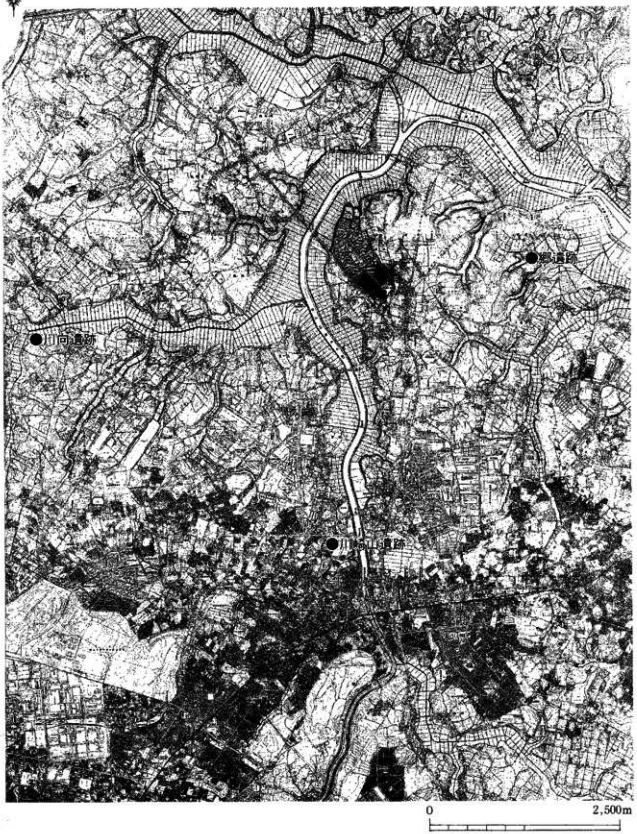
Ⅰ　調査に至る経緯

本市は首都圏のベッドタウンとして宅地開発が進んだ地域であり、平成８年４月の東葉高速鉄道の開業以来、この性格は強まっている。そうした状況の中、八千代市教育委員会（以下「市教委」と略）では千葉県教育委員会（以下「県教委」と略）の指導のもと、開発事業者からの埋蔵文化財の有無とその取り扱いについての照会（以下「照会」と略）に対処し、埋蔵文化財の保護に努めている。このうち確認調査が必要と判断される遺跡については、国庫と県費の補助を受け発掘調査を実施している。

川崎山遺跡　平成11年１月、長岡敏雄氏から共同住宅建設のため照会が提出された。これを受け現地踏査を実施したところ、現況は住宅展示場跡地で、遺物散布状況を観察できる地点は無かったが、周知の遺跡の範囲内であり、過去の周辺の確認調査の実績から、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、その旨回答した。この回答に沿って事業者と協議した結果、１月に文化財保護法第57条の２第１項の規定による土木工事の発掘届（以下「土木工事の届」と略）が提出され、準備の整った２月17日に調査を開始した。

郷　遺跡　平成10年10月、高橋秀行氏から草地造成のため照会が提出された。これを受け現地踏査を実施したところ、現況は荒蕪地で、遺物散布状況を観察できる地点は無かったが、周知の遺跡の範囲内であり、過去の周辺の調査の実績から、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、その旨回答した。その後、事業者との協議を重ね、11月に「土木工事の届」が提出された。事業者が伐採等を行い、準備の整った３月８日に調査を開始した。

川向遺跡　平成10年10月、高橋秀行氏から草地造成のため照会が提出された。これを受け現地踏査を実施した。現況は畑地と荒蕪地で、周知の遺跡の範囲内であったが、遺物の散布は確認できなかった。また、過去における調査の実績も無かった。照会面積が10，000㎡以上の県回答案件であるため、この旨を県教委に副申した。県教委と協議の結果、12月３日、試掘を実施することとなった。試掘の結果、縄文時代の土坑が検出されたため、照会地全域について確認調査が必要と判断しその旨回答した。その後、事業者との協議を重ね、12月に「土木工事の届」が提出され、事業者が伐採等を行い、準備の整った３月17日に調査を開始した。



第１図　市内遺跡位置図　Ｓ＝１／50,000

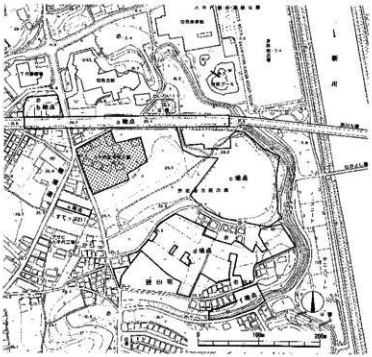
Ⅱ　各遺跡の概要

1．　川崎山遺跡ｇ地点

遺跡の立地と概要

川崎山遺跡は市域の南部、新川の西岸に位置する。南北を新川の低地から入る谷によって画された台地上一帯が範囲である。本遺跡については過去において６箇所の地点（ａ～ｆ地点）で調査を行っており、その結果旧石器時代から平安時代に至る遺構・遺物が確認されている。萱田地区遺跡群等とともに新川西岸遺跡群の一角を占める遺跡である。今回の調査区域はｇ地点である。

ｇ地点は川崎山遺跡の中では中央やや北寄りに位置する。ｇ地点の北方は次第に標高が下がり、池ノ谷津に至る。西方には成田街道（現国道296号線）大和田宿と萱田飯綱神社（権現）とを結ぶ権現道がある。



第２図　川崎山遺跡ｇ地点位置図

現地は以前、住宅展示場として利用されていたため全体に盛土が行われており、地表面観察では遺物を確認することはできなかった。隣接する畑地にも遺物は確認できなかった。

調査の方法と経過

調査区の形状に合わせて、100m×100mの大グリッドを設定し、その中に10m×10mのグリッドを設定した。この区画をもとに２m×５mのトレンチを10m間隔で設定し、必要に応じて拡張を行った。約750㎡を掘削し、遺構検出に努めた。

調査期間は平成11年２月17日～同年３月３日である。検出された遺構が土坑４基のみであったので、この土坑の本調査も併せて行った。17日基準杭設置、18日トレンチ設定、22日～24日重機表土剥ぎ、遺構検出作業及びトレンチ土層調査、25日～26日・３月１日～３日遺構調査、３月２日遺構以外の部分の埋め戻し、３月３日に遺構部分の埋め戻しを行った。

調査の概要

調査区の基本層序はⅠ表土層（盛土や埋土。砂利や砕石、砂などがまじる）、Ⅱ暗褐色土および褐色土層（砂・炭化物・焼土を含む）、Ⅲソフトローム層、Ⅳハードローム層となっている。調査区北東隅の土層の遺存状態が最も良好で、Ａ２－３グリッド（以下「G.」と略す）～Ａ２－４G.でⅡ層とⅢ層の間に褐色土層が認められた（第４図）。

調査区の中央で確認した土層によると、Ⅳ層上面の標高は南部のＡ１－69G.では21.7mであるのに対し、中央付近のＡ１－54G.では21.5m、Ａ１－56G.では21.04mと低くなる。また北部のＡ１－51G.では21.9mと再び高くなる。これは旧地形が、台地中央部から次第に低くなり、台地縁辺で再び高くなってから谷に落ち込むという状態であったことを示している。

Ⅱ層は調査区の大半で確認されたが、Ａ１－12・42・52・62各G．で検出された溝の北側には存在しなかった。この層は住宅展示場建設以前の畑地の耕作土と考えられ、溝はその畑地に伴う境界を示すものと考えられる。耕作土の直下でソフトロームに至るという土層は、川崎山遺跡ｄ地点・ｅ地点でも確認されている。

検出遺構は土坑４基で、それぞれ１号～４号土坑とした。ほかには前述の溝、風倒木痕を確認した。遺物は全く出土しなかった。

１号土坑

検出面は地表下0.7m、標高21.8mのところである。検出面の規模は1.85m×1.3mの長楕円形、底径は1.14m×0.64mである。深さは2.78mと、４基中最も深い。壁は概ね垂直で上部が若干開く。

覆土は１～３層が暗褐色・黒褐色の土で自然堆積と考えられる。４層以下はローム土・ロームブロックが主体で埋土と考えられる。９層は硬くしまった土で、当初ここが底面と思ったほどである。一度埋めたものを再利用した可能性がある。最下層の11層は特徴的な黒褐色土である。

２号土坑

検出面は地表下0.78m、標高21.7mのところである。検出面の規模は２m×1.2mの長楕円形、底径は1.8m×0.68m、深さは1.7mである。壁は概ね垂直であるが上部に向かって緩やかに開く。

覆土は１～４層が自然堆積、５層以下は埋土と考えられる。２～４層にかけてごく薄い焼土や炭化物が認められた。

３号土坑

検出面は地表下0.9m、標高21.5mのところである。検出面の規模は2.59m×0.7m、底径は2.51m×0.1mと極めて幅の狭い長楕円形で、他の３基とは異なった形態である。深さは1.2mと４基中最も浅い。短軸の断面形は漏斗状であるが上部の開き方が小さい。上部が削り取られているためと考えられる。長軸の断面は壁がオーバーハングしている。

覆土は１～２層が自然堆積、３層以下は埋土と考えられる。最下層の６層は、若干暗色を呈し特徴的である。

４号土坑

検出面は地表下１m、標高21.2mのところである。検出面の規模は1.7m×1.28mの楕円形、底径は0.97m×0.6m、深さは1.9mである。壁は概ね垂直であるが上部に向かって緩やかに開く。

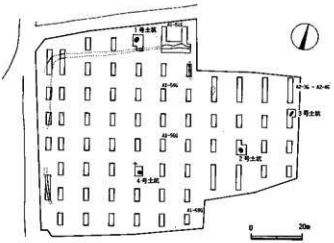
覆土は１～３層が自然堆積、４層以下は埋土と考えられる。最下層の11層は、特徴的な暗褐色土である。

４基とも、その形態から縄文時代に属する落とし穴状土坑と判断される。

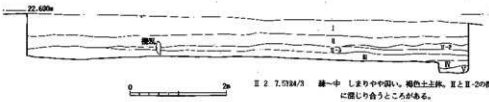
調査のまとめ

今回の調査の検出遺構は、縄文時代の落とし穴状土坑４基であった。川崎山遺跡における縄文時代の遺構は、これまでの調査地点においても落とし穴状土坑が主体である。ｂ地点で１基、ｃ地点で12基、ｄ地点で１基（但し確認調査のみ）、ｅ地点で１基が検出されている。全体的に狩場として土地利用されていたことが想像できる。

また、この地点において弥生時代以降の遺構等が検出されず、遺物も全く出土しなかったということと、ａ～ｆ各地点での調査結果を合わせて考えれば、川崎山遺跡における集落の展開は台地縁辺部を中心としていることがより明確になったと言える。



第３図　川崎山遺跡ｇ地点遺構検出状況図

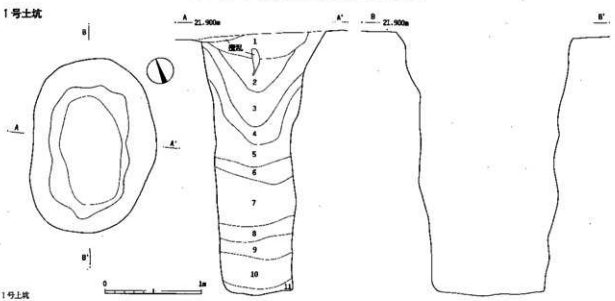


A２　3G～A２－4G 西壁土層断面

	色調	硬軟度	
I	―	疎～中	石・山砂等が混じり合う。埋め立てられた土と思われる。
II	7.5YR3/4	中	しまりよい。暗褐色土主体。黄色粒子・炭化材片・焼土含む。耕作土と思われる。
II-2	7.5YR4/3	疎～中	しまりやや弱い。褐色土主体。IIとII-2の間には攪作したように混じり合うところがある。
II-3	7.5YR4/3.5	中	しまりまとり強い。褐色土主体。層移層。
III	7.5YR4/4	中	ソフトローム。
IV	7.5YR4/6	中	ソフトロームだがちより色調が暗やかで、やや硬い。
V	7.5YR6/8	中～密	ハードローム。

色調は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』（136c 1993. 1）による（以下同じ）。

第４図　川崎山遺跡ｇ地点土層断面図

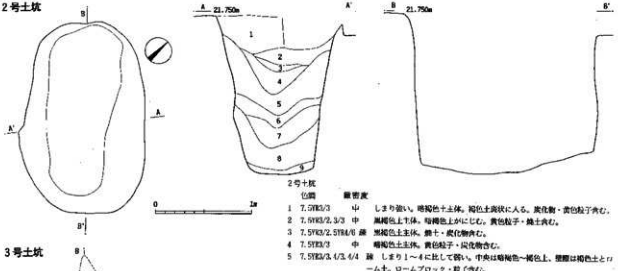


1号土坑

	色調	硬軟度	
1	7.5YR3/3	中	しまり強い。暗褐色土主体。褐色土斑状に入る。炭化物・黄色粒子含む。
2	7.5YR3/2.3/3	中	黒褐色土と暗褐色土が混じり合う。炭化物・黄色粒子含む。
3	7.5YR3/3.4/3	疎	褐色土と暗褐色土が混じり合う。ローム・ブロック・粒子含む。
4	7.5YR4/4.4/4	疎	しまり1～3に比して弱い。ローム上主体。褐色土とローム・ブロック含む。
5	7.5YR4/4	極疎～疎	しまりの中央部は弱く、壁際は強い。ローム上主体。30cm×5 cmのローム・ブロックが壁際に認められる。
6	7.5YR3.5/3.4/3.4/4	疎	しまり弱い。褐色土主体。ローム土・ローム・ブロック含む。
7	7.5YR4/4	極疎～疎	ローム土主体。
8	7.5YR4/3.4/4	疎	褐色土主体。若干褐色を呈す。ローム土・ローム・ブロック含む。
9	7.5YR4/4	中	しまり強いが、10との境界付近はすこしよる弱い。ローム上主体。
10	7.5YR3/3.4/3.4/4	極疎	しまりすこしよる弱い。暗褐色土・褐色土・ローム上が混じり合う。
11	7.5YR3/2	疎	しまり弱い。黒褐色土主体。

第５図　川崎山遺跡ｇ地点土坑実測図(1)

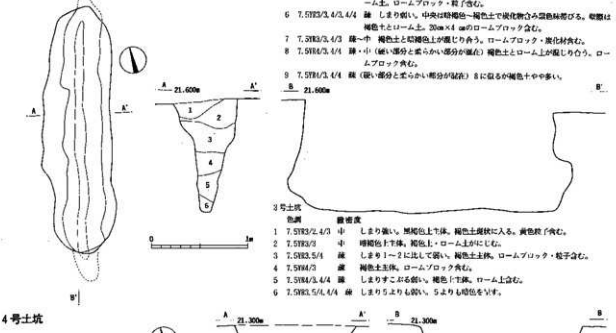
2号土坑



2号土坑

	色調	密度	
1	7.5YR3/3	中	しまり強い。暗褐色土体。褐色土斑状に入る。炭化物・黄色粒子含む。
2	7.5YR3/2, 3/3	中	黒褐色土下体。暗褐色土がにじむ。黄色粒子・焼土含む。
3	7.5YR3/2, 5YR4/6	疎	黒褐色土主体。焼土・炭化物含む。
4	7.5YR3/3	中	暗褐色土主体。黄色粒子・炭化物含む。
5	7.5YR2/3, 4/3, 4/4	疎	しまり1～4に比して弱い。中央は暗褐色～褐色上、壁際は褐色土とローム土。ロームブロック・粒子含む。
6	7.5YR3/3, 4/3, 4/4	疎	しまり強い。中央は暗褐色～褐色土で炭化物含み黄色斑部がある。壁際は褐色土とローム土。20cm×4 cmのロームブロック含む。
7	7.5YR3/3, 4/3	疎～中	褐色土と暗褐色上がまじり合う。ロームブロック・炭化材含む。
8	7.5YR4/3, 4/4	疎・中	(硬い部分と柔らかい部分が混在) 褐色土とローム上がまじりあう。ロームブロック含む。
9	7.5YR4/3, 4/4	疎	(硬い部分と柔らかい部分が混在) 8に似るが褐色トやや多い。

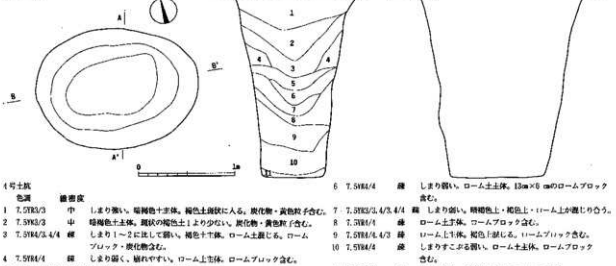
3号土坑



3号土坑

	色調	密度	
1	7.5YR3/2, 4/3	中	しまり強い。黒褐色上下体。褐色土斑状に入る。黄色粒子含む。
2	7.5YR3/3	中	暗褐色上下体。褐色上・ローム上がにじむ。
3	7.5YR3.5/4	疎	しまり1～2に比して弱い。褐色土主体。ロームブロック・粒子含む。
4	7.5YR4/3	疎	褐色土主体。ロームブロック含む。
5	7.5YR4/3, 4/4	疎	しまりすこぶる弱い。褐色上下体。ローム上含む。
6	7.5YR3.5/4, 4/4	疎	しまりうよりも弱い。うよりも暗色を呈す。

4号土坑



4号土坑

	色調	密度	
1	7.5YR3/3	中	しまり強い。暗褐色土主体。褐色土斑状に入る。炭化物・黄色粒子含む。
2	7.5YR3/3	中	暗褐色土主体。斑状の褐色土1より少ない。炭化物・黄色粒子含む。
3	7.5YR4/3, 4/4	疎	しまり1～2に比して弱い。褐色土下体。ローム土混じる。ロームブロック・炭化物含む。
4	7.5YR4/4	疎	しまり弱く、植代やすい。ローム上主体。ロームブロック含む。
5	7.5YR4/3, 4/4, 3.5/3	疎	褐色土下体。ローム下含む。
6	7.5YR4/4	疎	しまり弱い。ローム上主体。15cm×6 cmのロームブロック含む。
7	7.5YR3/3, 4/3, 4/4	疎	しまり強い。暗褐色上・褐色上・ローム上が混じり合う。
8	7.5YR4/4	疎	ローム上主体。ロームブロック含む。
9	7.5YR4/4, 4/3	疎	ローム上下体。褐色上混じる。ロームブロック含む。
10	7.5YR4/4	疎	しまりすこぶる弱い。ローム上主体。ロームブロック含む。
11	7.5YR3/3	疎	しまり弱い。暗褐色上主体。ローム上混じる。

第6図　川崎山遺跡g地点土坑実測図(2)

2．郷遺跡

遺跡の立地と概要

郷遺跡は、印旛沼から西に入り込む谷の北側の台地縁辺部に位置している。標高は23m前後を測り、谷との比高差は約12mである。調査区の現況は荒蕪地であるが、谷側の緩斜面部を除き以前は畑地として利用されていたようである。

調査区の北側には、江戸時代さくら往還道が通っており、周辺には道標が数基残されている。このさくら往還道を挟んだ北側隣接地は、花火工場建設のため、昭和62年度に台畑遺跡として確認調査を実施しており、古墳時代後期から平安時代にかけての住居跡15軒、土坑29基が検出されている。また、遺構は検出されていないが、縄文時代中期加曽利E式土器も多く出土している。

第７図　郷遺跡位置図　S＝１／2,500

調査の方法と経過

調査は任意に10m方眼を組んだのち、これに平行する形で２m×４mのトレンチを設定して実施した。また、検出状況を確認しながら、適宜トレンチの増設、拡張を行い遺構の捕捉に努めた。

調査期間は平成11年３月８日～17日で、８日機材搬入、９日方眼杭及びトレンチ設定、11日人力による方眼層確認掘削作業、12日～16日重機による表土除去作業、遺構検出作業、16日実測・撮影等記録作業、17日機材撤収により調査を終了した。

調査の概要

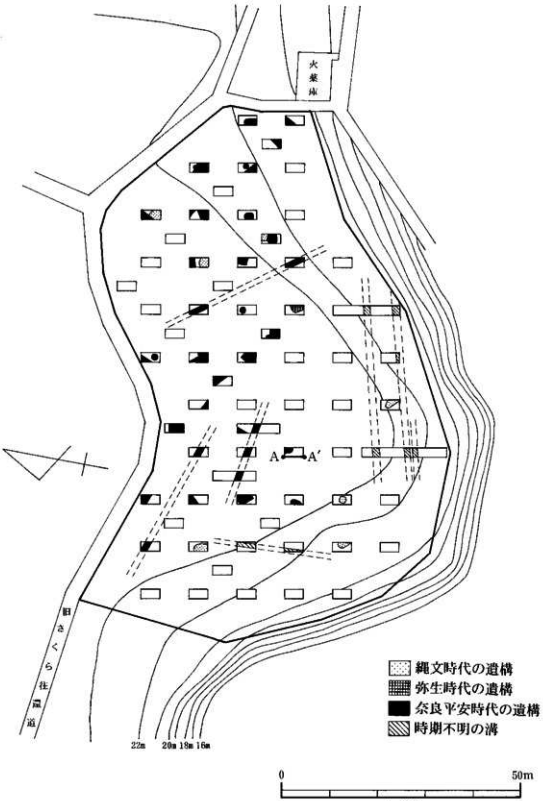
調査区の基本層序は、Ⅰ表土層、Ⅱ旧耕作土層、Ⅲ暗黄褐色土層（ローム漸移層）、Ⅳソフトローム層となっており、遺構検出作業はⅣソフトローム層の上面で行った。また、以前畑地として利用されていたため、部分的に農耕用トレンチャーによる攪乱が認められた。

調査の結果、縄文時代から奈良平安時代にかけての集落跡を検出することができた。縄文時代では中期住居跡４軒（加曽利E期）、早期炉穴１基、土坑２基。弥生時代では後期住居跡１軒。奈良平安時代では住居跡25軒、土坑６基、溝３条である。また時期不明の溝が４条検出されているが、これらの溝は畑地の根切り溝と思われる。調査区南部に３条平行して検出されたのは、畑地を南の緩斜面部に拡張していった結果と思われる。

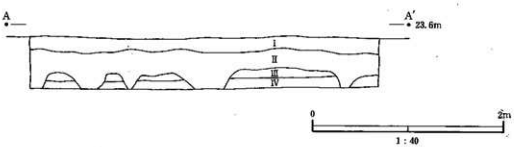
遺物は縄文土器と奈良平安時代土師器・須恵器が出土している。縄文土器は中期加曽利E式（第10図１～６）が主体となっており、その他に早期から中期にかけての土器が数片出土している。奈良平安時代では土師器が住居跡から出土しており、須恵器は数片のみの出土である。また墨書土器（第10図７）も１片出土している。

調査のまとめ

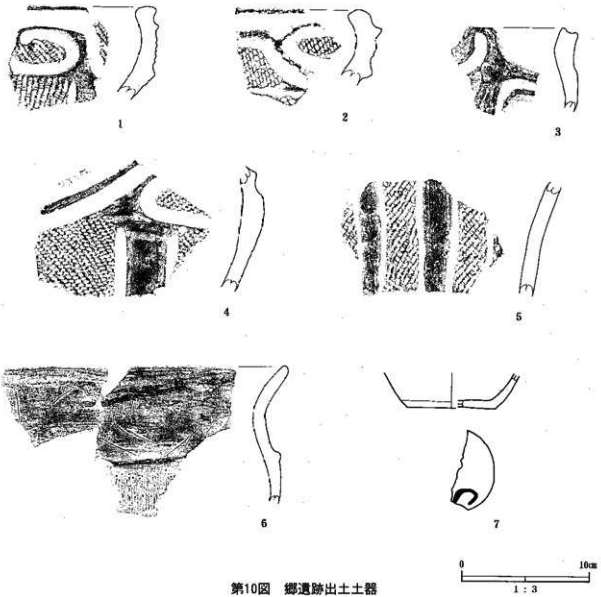
今回の調査では、縄文時代から奈良平安時代にかけての集落跡を検出することができた。縄文時代中期住居跡４軒、弥生時代後期住居跡１軒、奈良平安時代住居跡25軒の計30軒と遺構密度は高い。分布と



第８図　郷遺跡遺構検出状況図



第９図　郷遺跡土層断面図



第10図　郷遺跡出土土器

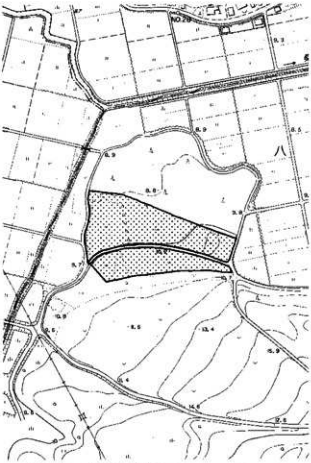
してはいずれも台地平坦部より検出されており、谷側の緩斜面部からは検出されなかった。縄文時代中期については、昭和62年度の北側隣接地における調査において該期の土器が多く出土していたが、住居跡は検出できなかった。今回該期の住居跡が４軒検出されたことにより、集落が台地縁辺部に展開していることが明らかになった。奈良平安時代については、北側隣接地における調査において住居跡が15軒検出されており、台地縁辺部から中央部に向かって広範囲に濃い密度で集落が展開していることが想像される。調査例が少ない地域であるため、資料の増加を待って更に検討していきたい。

3．川向遺跡

遺跡の立地と概要

川向遺跡は、八千代市西部、坪井川と木戸川が合流して桑納川となる地点の南岸の低位段丘上に位置している。標高は10m前後を測り、水田面との比高差は約１ｍである。調査区は、東西に走る農道により北部と南部に分かれる。現況は調査区北部が畑地、調査区南部が荒蕪地である。しかし、南部の荒蕪地においても農耕用トレンチャーによる攪乱が認められることから、北部と同様に以前は畑地として利用されていたようである。

川向遺跡の調査例はなく、今回が初めての調査となる。



第11図　川向遺跡位置図　Ｓ＝１／2,500

調査の方法と経過

調査は、南北方向に任意に幅1.5mのトレンチを設定して実施した。しかし、検出された遺構は土坑４基と少なかったため、遺構の周辺のみトレンチを拡張し、これらの遺構の本調査も併せて行った。

調査期間は平成11年３月17日～29日で、17日機材搬入、18日トレンチ設定、19、23日重機による表土除去作業、遺構検出作業、24、26日遺構調査、実測・撮影等記録作業、29日機材撤収により調査を終了した。

調査の概要

調査区の基本層序は、Ⅰ表土層、Ⅱａ耕作土層、Ⅱｂ旧耕作土層、Ⅲ褐色土層（新期テフラ層）、Ⅳ暗褐色土層、Ⅴ暗黄褐色土層（ローム漸移層）、Ⅵソフトローム層となっており、遺構検出作業はⅥソフトローム層の上面で行った。遺構確認面までの深さは、約0.3～1.0mで南から北に向かうにしたがってしだいに深くなっている。また、調査区北部のトレンチ北端部においては遺構確認面から湧水があり、Ⅴ、Ⅵ層は鉄分を多く含み粘土化していた。

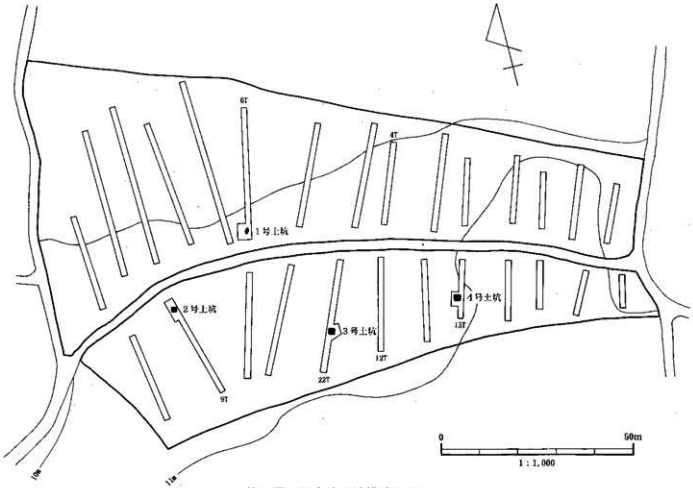
調査の結果、土坑４基を検出することができた。

１号土坑

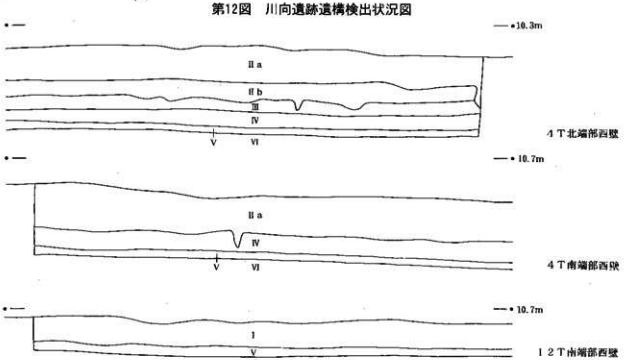
６Ｔより検出された。平面形は1.52m×0.97mの長楕円形を呈し、深さは0.37mを測る。壁は斜めに掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。底面北端に0.40m×0.36m、深さ0.08mの楕円形のピット１基を伴う。遺物は出土していない。

２号土坑

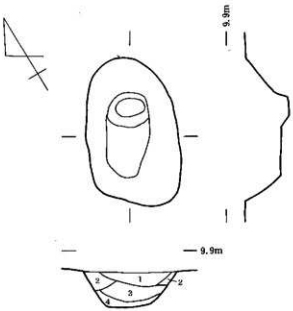
９Ｔより検出された。新旧の遺構が重複している。旧遺構は平面形が1.27m×1.27mの方形を呈し、深さは0.18mを測る。新遺構は旧遺構の上部を壊して造られており、平面形が1.39m×1.46mの方形を呈し、深さは0.05mを測る。いずれも壁は垂直に近い状態で掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。覆土中には、細かい炭化材が密集して堆積しており、焼土粒も微量に混じっている。底面及び壁面には部分的に火熱を受けた痕跡が認められる。遺物は出土していない。



第12図　川向遺跡遺構検出状況図

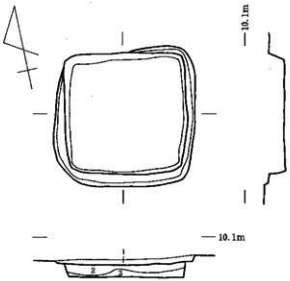


第13図　川向遺跡土層断面図



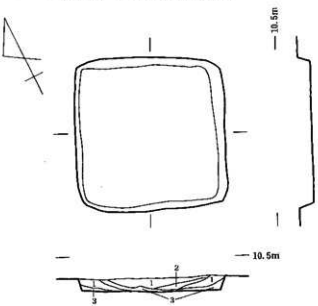
1号土坑

1 黒色土層　　ローム粒が微量混じる
2 暗黄褐色土層　ロームと暗褐色土が混じりあった層
3 黒色土層　　ローム粒が少量混じる
4 暗黄褐色土層　ロームと暗褐色土が混じりあった層



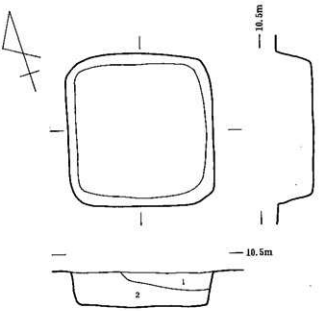
2号土坑

1 炭化材層　　細かい炭化材が密集して堆積した層
2 暗黄褐色土層　ロームと暗褐色土が混じりあった層。炭化粒が少量混じる。しまりつよい
3 炭化材層　　細かい炭化材が密集して堆積した層。焼土粒が微量混じる



3号土坑

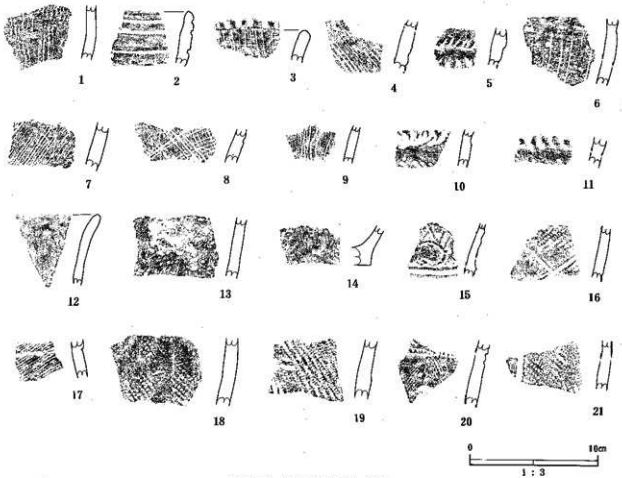
1 暗褐色土層　ローム粒及びロームブロックが少量混じる。炭化粒が少量、焼土粒が微量混じる
2 黄褐色土層　ロームに暗褐色土が少量混じる
3 炭化材層　　細かい炭化材が密集して堆積した層。ローム粒及びロームブロックが少量混じる。焼土粒が微量混じる



4号土坑

1 黒褐色土層　細かい炭化材が多量混じる。ローム粒多量混じる
2 炭化材層　　細かい炭化材が密集して堆積した層。焼土粒が微量混じる

第14図　川向遺跡土坑実測図



第15図　川向遺跡出土土器

３号土坑

22Tより検出された。平面形は1.63m×1.55mの方形を呈し、深さは0.15mを測る。壁は垂直に近い状態で掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。覆土中には、細かい炭化材が密集して堆積した層が認められ、焼土粒も微量に混じっている。底面及び壁面には部分的に火熱を受けた痕跡が認められる。遺物は出土していない。

４号土坑

13Tより検出された。平面形は1.60m×1.50mの方形を呈し、深さは0.38mを測る。壁は垂直に近い状態で掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。覆土中には、細かい炭化材が密集して堆積しており、焼土粒も微量に混じっている。底面及び壁面には部分的に火熱を受けた痕跡が認められる。遺物は出土していない。

出土遺物

遺構内より遺物の出土はなく、遺物はすべて遺構外よりの出土である。縄文土器が少量と奈良平安時代土師器が数片出土している。縄文土器は前期浮島～興津式を主体としており、その他に早期（撚糸文系）から中期（加曽利Ｅ式）にかけての土器が数片出土している。第15図の１は早期撚糸文系の土器である。２～14は前期浮島Ⅲ～興津Ⅱ式、15は十三菩提式である。16～19は前期末の縄文施文の土器である。20は中期五領ヶ台式、21は加曽利Ｅ式である。

調査のまとめ

今回の調査では、土坑４基を検出することができた。１号土坑は遺物の出土はないものの、トレンチ

出土の遺物から縄文時代前期浮島Ⅲ～興津Ⅱ期頃の所産と思われる。また、２～４号土坑は遺物の出土がないことや、形状や特徴が酷似していることから、同じ性格の遺構と思われる。覆土中に細かな炭化材が密集して堆積しており、底部や壁部が部分的に焼けていることから、中近世以降の炭窯或いはそれに関連した遺構ではないかと思われる。

川向遺跡は、水田面との比高差が約１ｍという低位段丘上に位置しており、台地上の遺跡とは異なる遺構の展開が想像された。しかし今回の調査では縄文土器の散布は認められたが、該期の遺構は土坑１基のみであり、遺構密度が非常に薄い区域であるということが確認された。現在遺跡の南東側の台地上では、区画整理事業に伴う発掘調査が千葉県文化財センターにより進められている。今後は台地上の調査成果とあわせて川向遺跡周辺の遺構の展開を考えていきたい。

図版１　川崎山遺跡ｇ地点

(1)　調査状況

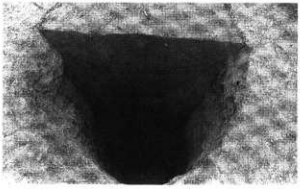
(2)　１号土坑土層断面

(3)　１号土坑完掘状況

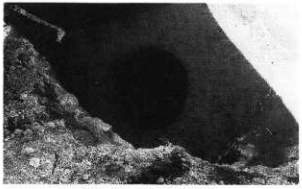
(4)　２号土坑完掘状況

(5)　３号土坑土層断面

(6)　３号土坑完掘状況



(7)　４号土坑土層断面



(8)　４号土坑完掘状況

図版２　郷遺跡

(1)　調査区全景

(2)　土層断面

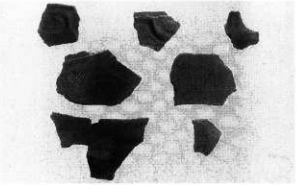
(3)　調査風景

(4)　遺構検出状況

(5)　遺構検出状況

(6)　遺構検出状況

(7)　遺構検出状況



(8)　出土遺物

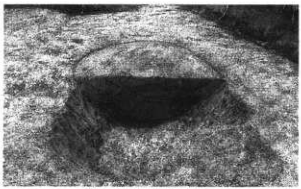
図版３　川向遺跡(1)

(1)　調査区全景

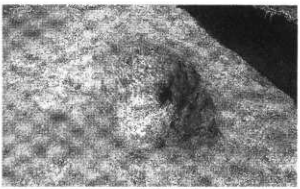
(2)　４Ｔ北端部西壁土層断面

(3)　調査風景

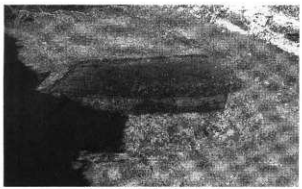
(4)　調査風景



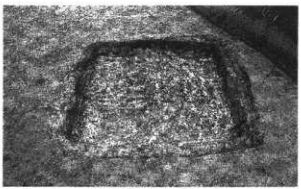
(5)　１号土坑土層断面



(6)　１号土坑完掘状況

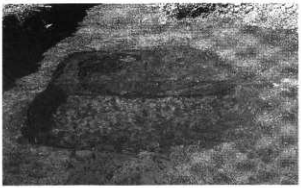


(7)　２号土坑土層断面



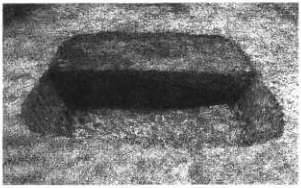
(8)　２号土坑完掘状況

図版４　川向遺跡(2)

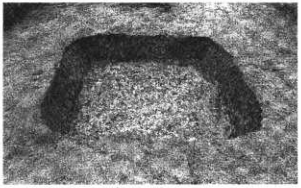


(1)　３号土坑土層断面

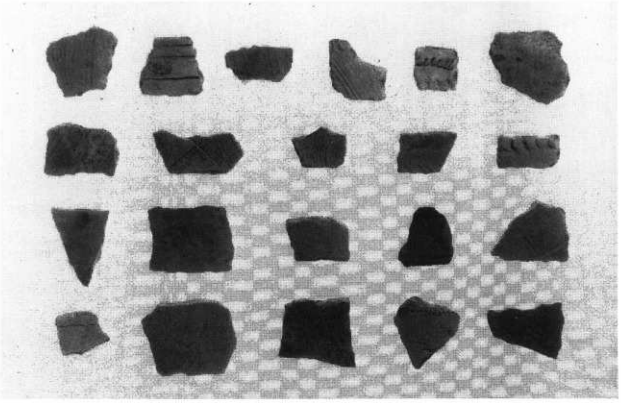
(2)　３号土坑完掘状況



(3)　４号土坑土層断面



(4)　４号土坑完掘状況



(5)　出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちばけんやちよししないいせきはっくつちょうさほうこくしょ　へいせい１１ねんど
書　　名	千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成11年度
編著者名	宮澤久史・常松成人・武藤健一
編集機関	八千代市教育委員会
所 在 地	〒276-0045　八千代市大和田138-2　TEL. 047（483）1151
発行年月日	西暦　1999年９月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
川崎山遺跡 g 地 点	八千代市萱田町字 川崎山738-1他	12221	241	35度 43分 12秒	140度 6分 44秒	19990217 ～ 19990303	750㎡ /7,215㎡ 本調査60㎡	共同住宅建設
郷 遺 跡	八千代市保品字間谷 1426-2他	12221	79	35度 45分 24秒	140度 8分 19秒	19990308 ～ 19990317	604㎡ /4,379㎡	草地造成
川 向 遺 跡	八千代市吉橋字川向 3031-1他	12221	264	35度 44分 41秒	140度 4分 19秒	19990317 ～ 19990329	1,029㎡ /10,714㎡ 本調査30㎡	草地造成

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
川崎山遺跡	土坑群	縄文時代	落とし穴状土坑　４基	なし	確認本調査
郷 遺 跡	集落跡 集落跡 集落跡	縄文時代 弥生時代 奈良平安時代	住居跡４軒　土坑２基 炉穴　１基 住居跡１軒 住居跡25軒　土坑６基 溝　３条	縄文土器 土師器，須恵器	確認調査
川 向 遺 跡	散布地 窯 跡	縄文時代 中近世以降	土坑　１基 炭窯　３基	縄文土器 奈良平安時代土師器	確認本調査

調　査　組　織（平成10年度末現在）

調査主体者　磯貝　謹吾（八千代市教育委員会教育長）

事務担当者　藤城　恒昭（八千代市教育委員会生涯学習部長）
三浦　幸子（八千代市教育委員会生涯学習部次長）
実川　憲　（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長）
小名木伸雄（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化財係長）
秋山　利光（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化財係副主査）
宮澤　久史（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化財係主事）

調査担当者　常松　成人（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化財係主事）
武藤　健一（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化財係主事）

調査補助員　植田　正子　上田真里子　遠藤　玲子　遠藤　誠　笠川千代子　古滝　洋子
鈴木　一代　鈴木　勉　田久保松枝　立石ふく子　鳥羽　良子　鳥畑　文江
永島　辰夫　長田　京子　野中　則子　花島喜久江　原田　雪子　日向　洋子
福島　正晃　堀井　弥生　見神　光恵　三宅由美子

整理補助員　植田　正子　古滝　洋子　鈴木　勉　長田　京子　福島　正晃　見神　光恵

事　務　員　三宅由美子

千葉県八千代市
市内遺跡発掘調査報告書
平成11年度

印刷日　1999年９月28日
発行日　1999年９月30日
発　行　八千代市教育委員会
　　生涯学習部社会教育課
　　〒276-0045　八千代市大和田138-2
　　TEL 047 (483) 1151
印　刷　有限会社　八千代印刷